

X-MEN:ファイナル ディシジョン

2006(平成18)年6月29日鑑賞(試写会・リサイタルホール)

★★★



監督=ブレット・ラトナー/出演=ヒュー・ジャックマン/ハル・ベリー/ファムケ・ヤンセン/イアン・マッケラン/ベン・フォスター/ジェームズ・マーズデン/パトリック・スチュワート/ケルシー・グラマー (20世紀フォックス映画配給/2006年アメリカ映画/105分)

第8章

やっぱりお子様向け？

……数多いマーベル・コミックス社の『X-MEN:ファイナル ディシジョン』をはじめて観たが、その壮大さにビックリ。スパイダーマンやハルク、そしてスーパーマンのような1人のヒーローではなく、人間に対する「ミュータント」という新たな「種」を創造したところが、このシリーズのミソ……？ しかし今回は、ミュータントから人間に戻すための新薬「キュア」が開発されたから大変。「ブラザーフッド」+「オメガ・ミュートィーズ」の連合軍と人間との対立～戦争を解消するため、ミュータントの「X-MEN」たちは、どのように行動するのだろうか……？ もっとも『スター・ウォーズ』と同じように、勢力図やそれぞれのキャラクターをよく整理して観ないと、中年のおじさんたちにはよくわからないかも……？



X-MEN とは？

今さら「X-MEN とは？」という小見出しを掲げるのは陳腐かもしれないが、私にとってははじめての映画だから仕方がない。この『X-MEN』は、アメリカのコミック誌マーベル・コミックス社のスタン・リー原作の大ヒット作で、1963年9月の発表以来、約43年後の現在でも売り上げNo.1をキープしているとのこと。『スパイダーマン』や『ハルク』そして『スーパーマン』などは個人的なヒーローだから、物語は単純でわかりやすいが、この『X-MEN』は、物語も登場人物(?)もかなり複雑。その上、今回の『X-MEN』は前2作の『ファイナル

ディビジョン』(?)だから、前作までのストーリーと登場人物を知っていることが大前提。

したがって私にはたくさんの予習が必要な映画だったが、その予習のおかげであまり違和感なく『X-MEN』の世界、つまりミュータントの世界に入っていくことができたが……。

今回はさらに“キュア”という新概念も……

ミュータントとは、特殊な能力をもったある「種」のことだが、それは通常の人間とは異質であるために、さまざまな問題が……。アメリカでは黒人問題をはじめとして人種差別問題が深刻だが、その分、差別についての考え方がオープンで、同和問題をはじめとする差別問題を内包したままの日本とは大違い……。そんなアメリカだから、コミックの世界でも人間 VS ミュータントという面白い発想の物語が生まれるのかも……？

その上、今回は愛する息子エンジェル（ベン・フォスター）がミュータントであることを知った父親ウォーレン・ワージントンⅡ世（マイケル・マーフィ）が、ミュータントが人間に戻るための新薬“キュア”を開発するというストーリーが大きなポイント。ミュータントから人間への変身を望む者はそれでいいのだろうが、それを治療と称したり、その変身を強要することになれば、それはあのナチスドイツによるユダヤ人狩りと同じ……？

「派閥」が生まれるのは必然……？

ミュータントを正しく導くための学校エグゼビア・スクールの創始者であるプロフェッサー X（パトリック・スチュワート）は、バランスのとれた立派な指導者。ちなみに、「X-MEN」とはこのスクールの卒業生の中から選ばれた、優秀な者で構成された平和のために活動するチームのこと。ところが“キュア”が開発され、その取り扱いをめぐるミュータントの意見が二分されるような状況になると、新薬反対の勢力が形成されてくるのも当然。このいわば過激派グループが「ブラザーフッド」であり、そのボスがマグニートー（イアン・マッケラン）。またこのブラザーフッドと結びついたのがカリスト（ダニア・ラミレス）率いる

「オメガ・ミューティーズ」。“キュア”の取り扱いを巡ってアメリカ大統領（ジョセフ・ソマー）率いる人間たちとブラザーフード+オメガ・ミューティーズ連合軍が対立する中、プロフェッサーX率いるX-MENたちは平和を守るため、どのように行動するのだろうか……？

多士済々なX-MENたち……

前2作を観ていなかった私には、そもそも今回は誰が主役級の扱いになるのかもわからなかったが、今回のそれはローガン（ヒュー・ジャックマン）とストーム（ハル・ベリー）、そして前作で死亡したと思われていたジーン・グレイ（ファムケ・ヤンセン）の3人。もっとも、X-MENのメンバーたちは多士済々で、さまざまな特殊能力を持った男女が他にもたくさんいる。

残念なことに、今回はこのX-MENのメンバーたちからも、自由に変身することができるミスティーク（レベッカ・ローミン）や火を自由に操ることができるパイロ（アーロン・スタンフォード）など、X-MENを離脱して「ブラザーフード」のメンバーになる者も……。

今回のキーパーソンは、何といっても濁流の流れを変えるほど強力な念動動力のテレキネシスを持った女性、ジーン・グレイ。もし彼女が自分の能力を、自分でコントロールできなくなったらどうなるのか、それが第3作＝ファイナルの大きなテーマとなる。その力を制御しようとするプロフェッサーXに対して、その力を最大限活用しようとするのがマグニートー。そして、自分の並外れた能力に悩む彼女に愛を感じているのが、ローガン。

こんな多士済々のX-MENたちが縦横無尽に暴れ回るストーリーは、バカバカしいと思いつつ、それなりに楽しく面白いもの。

その詳細はとても書ききれないし、もともとこれは観て楽しむ映画だから、これ以上ここには書かない。とにかく2時間弱の間、バカになって頭の中を空っぽにして楽しもう。

ハル・ベリーの路線は……？

この映画で、トルネード（竜巻）のようにスピンしながら空を飛ぶという能力

を發揮するのが、ハル・ベリー扮するストーム。ハル・ベリーは、『チョコレート』（01年）でアカデミー賞最優秀主演女優賞を獲得した、はじめてのアフリカン・アメリカンの女性で、「歴史の扉は開いたのよ!」という授賞式でのスピーチは、感動的なものとして語り継がれている。『チョコレート』で彼女は、死刑囚の夫を持つ妻という難しい役柄を演じたが、特に刑務所の看守とのラブシーン（ベッドシーン）は名場面（『シネマルーム2』43頁参照）。

そんなハル・ベリーだが、彼女の抜群のスタイルの良さが災いして（？）か、その後は『ゴシカ（GOTHiKA）』（03年）（『シネマルーム6』302頁参照）は別として、『007/ダイ・アナザー・デイ』（03年）でのボンドガール役（『シネマルーム2』117頁参照）や『キャットウーマン』（04年）での超セクシーなコミックキャラクター役（『シネマルーム7』356頁参照）、そして『X-MEN2』（03年）、本作と、その肉体的魅力を誇示した作品が続いている。彼女の美しい肢体をスクリーン上で拝めるのはありがたいことだが、私としてはこれだけの美貌と演技力をもっと感動的な作品に活かしてほしいと思うのだが……。

最後まで席を立たないように……

今日は試写室ではなく、試写会だったから観客は多い。私は常々エンドロールが流れ終わるまで席を立たないことを原則としているが、今日はその後の予定があったので、エンドロールが流れ始め、席を立ち始める観客が続く中、それに続いて私も外に出ようとした。

ところが出口で、宣伝担当者から「ラストにワンシーンありますよ」と言われたため、あわてて席に戻りラストまで鑑賞。わずか数秒のワンシーンだけだったが、そこに登場した人物は……？

この映画は『X-MEN：ファイナル ディシジョン』とタイトルが付けられているが、今回の成功の具合によっては、ひょっとして第4作があるのかも……？

2006(平成18)年7月1日記